

適正施設ガイドライン

【チーター *Acinonyx jubatus*】

2020年10月

公益社団法人日本動物園水族館協会

はじめに

チーターについて

- ・ 体長：105～152cm、尾長：51～87cm、肩高：約76cm、体重：35～55kg。
- ・ 雄は雌より若干大きめ。陸上では最速の哺乳類で、時速110km以上のスピードが可能。
- ・ 他のネコ科と違い、引き締った体、長い四肢を持ち、引っ込まない爪を持つ。
- ・ 被毛は黄褐色か淡黄色で、黒い斑点があり、短く硬い。頭は小さく、顔には黒い涙のあとのような線（涙状線）が目の内側のふちから口にかけて鼻の両脇にあるが、太陽の光から目を守り、狩りの時にも役に立っている。

1 飼育環境

- ・ チーターの施設計画時に留意すべき事項

- ① 特定動物であり、計画時には所轄官庁への許可申請が必要。
- ② 走ることができる広い敷地が必要。
- ③ 感染症に弱く、大型ネコ科動物の存在にストレスを感じるため、他のネコ科動物の飼育施設と離れていることが望ましい。
- ④ 木登りは比較的苦手だが、幼獣は木に登ったりネットを這い登ったりすることがある。また、地面を掘ることもある。
- ⑤ 繁殖特性を考慮し、雌雄別棟あるいは仕切りによる分離飼育が望ましい。

1-1 温度

チーターは寒冷に対して比較的耐えるが、寝室内は15℃以上30℃以下を推奨する。

暖房器具としては、赤外線ヒーター、ファンヒーター、エアコン、床暖房が用いられる。

床暖房使用時に低温火傷をひきおこすケースがあるため、特に体位をあまり変更しない老獣での使用時は注意を要す。

夏季の管理は温度よりも湿度が重要である。発汗による体温調節機能が弱く、湿度が高いと熱中症になりやすい。とくに高湿度下でのペアリングや親子の分離などをおこなうときには、注意を要す。エアコンや大型扇風機の設備が必要である。

1-2 湿度

おおよその目安として、65%前後が望ましい。

夏の湿度には注意がより必要。

湿気が多い場合は扇風機・エアコン等を使用し湿度を保つようにする。また、暖房で乾燥する状況であれば加湿器を活用するようにする。

1-3 音、振動

※ 基準は特になし（稀に神経質な個体については、音の大きいエリアから離すことあり）

1-4 照明

12時間以上室内にいる場合には、自然なサイクルへ促すため人工または自然光を用いる必要がある。

1-5 面積

- ・ 放飼場

早く走るという特性を持つチーターにとって、できる限り広い放飼場と予備放飼場を複数設備することは重要である。とくに育成期のチーターにとって十分な運動と日光浴は筋・骨の健全な成長にきわめて重要である。

チーターの飼育施設を計画する場合、いかに各個体が安全かつ効率的に放飼場を使用できるように設計するかが大きなポイントの一つになる。

サファリ形式の放飼場としては、5,000 m²以上が望ましい。

小さなエリアでは最低でも20 m²必要で、隔離や導入、トレーニングにも使用する。

※ 繁殖に成功している国内の飼育施設のうち最少は、40.87 m² (6.1m×6.7m) である。

1-6 容積

※基準は特になし

1-7 構造

1) 展示

(※ 数値はAZA Cheetah Husbandry Manual、EAZA Best Practice Guidelines Cheetah 参照)

① モート式展示

展示面の遮蔽物がなく壁面の造作や他の展示場との組み合わせによりパノラマ展示などの展開により自然な光景が作り出せる。動物が近くに見えない、堀への転落の危険性、客からの投げ込みなどの欠点がある。

堀の深さは3.6m以上必要であるが、45度角で60cmのしのび返しを設置することで、深さを3mに抑えられる。また、上部に電柵を設置することで這い登る動きに対して二重の対策が推奨される。具体的な計画に際しては所轄官庁の確認をとる必要がある。

展示場は走行に有利であること、闘争や帰舎誘導などの対策、客から見やすいなどの理由で細長い形にせざるを得ない。展示場内での闘争事故に備えて高圧放水設備があると良い。

② ガラス展示

日陰や冷暖房の岩や送風を駆使することで、間近に動物を観察できる。

70kgの物体が時速60kmで衝突しても耐えられる強度が必要。視角の問題で広い展示ができないため、寒暑時や幼獣展示の室内展示場として応用価値が高い。

新たな個体を新規展示する場合は、ガラス面に衝突しないように簡易柵を設置するなど、安全にガラスを認識させる配慮が必要である。

③ 檻展示

比較的近くで展示できるため、視覚嗅覚の面では有効も、チーターを展示するには不適な展示方法といわざるを得ない。予備的な展示・放養への応用にとどめたい。

※ 格子サイズについては各都道府県の所轄官庁の確認をとる必要がある

④ サファリ式展示

車輛にて通過しながら動物を観察する。比較的広い展示場で多頭数の展示、複数グループの放飼が可能。飼育員の運転する車輛により闘争時の制圧ができることから挑戦的な雌雄同居が可能であり、複数放飼による個体間刺激もあり繁殖に有利である。マイカー客の挙動監視や電動ゲートからの脱走防止のための二重ゲート・4m高のフェンス、45度角で60cmの忍び返し及び電気線など危険防止へ細心の注意と設備、常時監視の労力が必要である。

※ フェンスは45~60kgの物体が時速90kmで接触しても耐えられる強度が必要

※ パドック内では、高さ2.5mで45度角の忍び返しおよび電気線に対応可

2) 獣舎扉（人用）

- ・ 獣舎の扉は脱走防止の観点から二重とする。
- ・ 扉は堅牢な鋼製、施錠扉とし外からの侵入にもそなえる。入室前に内部の状況が確認できるように、小窓をもうける。
- ・ 扉は舎内側に開くのを基本とする。あるいはスライド式とすることで、舎内外に踏み槽を設置できるなどの利点もある。

3) 踏込み槽

- ・ 防疫のため入口には踏込み槽を設置する。
 - ・ 固定式踏込み槽：獣舎内側への設置が可能。深さは5～10cm。
 - ・ 非常時の通路確保のため蓋を準備しておくが良い。
 - ・ 掃除がしにくい欠点がある。
 - ・ 移動式踏込み槽：パン箱やセメント舟で代用できる。
 - ・ 扉の開側には設置できない。
 - ・ 緊急時に寝室前にも設置できる。
- ※ 長靴以外の使用も考慮しプラスチックマットや麻布など敷く場合もある。
- ※ 消毒液は日光、泥などで効力が減弱するため、消毒液を過信しない。感染源になる場合もある。

4) 寝室

比較的多産（3～7頭）であり、繁殖個体の相性などの特性もあることから、できるだけ多くの寝室を確保したい。短期間に増数することもあり最低でも5室は設備したい。

① 寝室の広さ

- ・ 最低でも幅2m×奥行き3mは必要。
- ・ 兄弟など複数同居も可能であり、大小2タイプの寝室を用意するのも良い。

② 床面の仕様

- ・ チーターのパットは他のネコ科動物と比べると硬いため滑りやすい。床面の材質は適度にざらついたコンクリート製とする。
- ・ 糞尿による汚れを防止するためにスノコも用いられるが、かじってしまうこともあり注意を要す。

③ 仕切り（キーパー通路側）

- ・ 金網や格子の構造は基本的には条例で指定されたものとする。
- ・ 個体によっては人に対して両前肢を叩きつけるような威嚇行動がある。格子部に先鋭なものや手や指が挟まる余地がないかチェックが必要。
- ・ 格子の材質は塗装の無いステンレス製がよい。

④ 寝室間の仕切り

- ・ 隣り合う寝室には見合いや個体の室間移動のため出入り口をつけるのが望ましい。
- ・ 片側の仕切りは鉄板として相性の悪い個体どうし完全閉鎖用とし、もう片側の仕切りはお見合いや相性の良い個体間の安心要素として金網とすると便利である。
- ・ 仕切りには落とし戸タイプと水平スライドタイプがある。

5) 給餌設備

- ・ 安全に給餌するために給餌口を設ける。
- ・ 給餌時にチーターが慌てて頭や前肢を柵などに強くぶつけることがあり、構造物の角や接続部が先鋭にならないよう配慮する。

6) 給水設備

- ・ 可動式の給水槽を使用することが多い。
- ・ 給水槽の材質は塗装の無いステンレス製がよい。角が先鋭にならないよう注意する。
- ・ 給水槽の差込口は隙間が無いようにし、チーターの前肢が出ないようにする。

1-8 設備

1) スクイズケージ（獣舎内）

チーターはスクイズケージ（狭め檻）に収容し、無麻酔下で採血や個体によっては点滴が可能である。サイズは概ね、長さ 150～160cm、幅 60～80cm、高さ 70～80cm である。

材質はステンレス製がよく、組み立て式やシュートに設置された固定式、車輪のついた移動式のものがある。

2) 監視カメラ（寝室内）

監視カメラは寝室内の行動観察や記録に有用である。特に新生児の出産状況や授乳の有無などの確認に、母獣を刺激することなく確認できる貴重な手段である。

主要な寝室に機材、配線を設備しておくとう便利である。

3) シェルター（放飼場）

高いところから周りを見渡す場、また身を守るため、隠れ場としてあった方が良い。

4) 自然木（放飼場）

周りを見渡す場、マーキング、爪とぎ場所としてあった方が良い。

1-9 水（水質）

※ 基準は特になし

1-10 給水

- ・ 放飼エリアにも飲み水場を設置する。